

オレは悪魔だぜ

木村直輝

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

【あらすじ】

人生という長いとも短いともいえる道の途中で、『ハーメルン』のあるページに迷い込んだ貴方。貴方はそこで奇妙な出会いに見舞われ、話を聞いてくれないかと持ち掛けられる――。教会と悪魔、神秘にすぎる亡くしものをした人たち、そして死に別れた一組の男女。それは、貴方に向けて語られる物語。

※インスパイア※

カラオケで友人が歌った米津玄帥さんの『Lemon』のMVが始まりでした。

【警告】

当小説は読まれる方によって不快に感じる場合がございます。

【マルチ投稿】

「NOVEL DAYS」などの複数のサイトで公開しています。
公開サイト全てに「ハーメルン」のリンクを貼っています。

目次

あとがき・追記	5	4	3	1・2
28	26	17	10	1

おっ……？

どうした？

道にでも迷ったか？

いや、なに。こんなところに人が来るなんて珍しいからなあ。道に迷ったのかと思ってよお。まあ、人生。色々あるわな。

昔会った詩人が言ってたよ。人生ってえのは本当は一本道の迷宮なんだとさ。でもその壁を人は知らず知らず勝手にぶち抜けて迷路に迷っちゃまうんだとさ。

はっ。さっぱりわかんねえよな。……とお、話がずれちゃまったなあ。

で、アンタはどうしたんだ。迷ってここに来ちゃった口か。ハッ、まあなんでもいいさ。なあ、アンタ。アンタ、ちよつくらオレの話に付き合わねえか。

いや、ここで会ったのも何かの縁ってやつだろう？ このまますぐ引き返しちまうってえならオレは引き止めやしないけどよ。せつかく来たんだ。ちつたあゆつくりしていけよ。

魂だけでもよ、ここに来たんだからさ。

なあ、ちよつど昔のことを思い出してたんだ。オレはよお。誰かと話したい気分だったのさ。いや、誰かに話したい気分だったのさ。なあに、昔の話をよお。そこにアンタがやって来た、ってえんだから、こりやあそういうことだろお？

なあ？ そう思わねえか。

まあ、酒の一つも出せやしないが、どうせ出したって飲めないだろう？

魂だけなんだからさ、アンタ。

ハッ、まあいいさ。なあ、いいだろう？ まあ、オレは勝手に話し始めるからよお。聞きたきや聞いてくれ。そうじやなきや帰りやあ

いい。

聞く準備はできたかい。さあ、話し始めるぜ？

2

あれはどれくらい前のことだったかなあ……。

もう、覚えちゃあいねえや。オレはずっとここにいるもんだからよお、時間の感覚つてえのがよくわかんなくなっちまったんだ。なんせ、客人も来やしなからなあ。

いやあ、アンタが客じやないって言ってるんじゃないぜ。言つたら？
ここには滅多に人が来ないって。そういう意味さ。

ところでアンタ。アンタが来たのは何年だ？ 今は何年だ？
できれば西暦で答えてくれるとありがてえな。

……ふうん、そうか。そうかそうか。ああ、わかった。十分だ。訊いたオレがばかだったさ。わかんねえもんはわかんねえんだからな。だからもう、それについてはやめにしよう。

ただ一つ、ただ一つ確かなのはな。もう、それは百年くらい前のことになるのかもしれないし、五十年くらい前の話になるのかもしれない。ひよつとすると十年やそこらしか経つてないかもしれないし、もつと言うならもう何百年も昔のことだったかもしれない、つてえことだけだ。

でもな、オレにとつちやあ同じことなんだ。変わらねえのさ。何年前の話だつてよお。ここでこうして、もう動くことのねえ今の中で延々と永遠と立ち止まってるオレにとつちやあよお。そんなことはもう、関係ないのさ。何年昔の話でもねえんだ。悪いな。もしかするとアンタにとつては気になるところなのかもしれないが、まっ、そこはアンタの想像力で補ってくれよ。オレの姿とおんなじようにさ。

そうそう、アンタにはオレが見えてるかい？ どんな風に見えてるかい？ いやあな、魂だけでもしつかりものが見えてる奴もいれば、なんにも見えも聞こえもしねえ奴もいんのよ。アンタはどつちかつ

てな、ちよつと気になつたんだよ。

どうだい？ 若くてハンサムな男に見えるかい？ それとも汚らしいオヤジに見えるかい？ いんやあ、ひよつとして全身が髪の毛で覆われた緑の肌の妖精にでも見えてるかい？ 聞かせてくれよ。オレはどう見えてるかい？

……へえ、そうかい。まあ、なんでもいいさ。アンタに任せるよ。だってそういう場所だろここは。見た目も声も、全部アンタに任せるよ。なんにも見えも聞こえもなくなつて、思い浮かばなくなつて、それだつて構わないさ。だってそういう場所だろここは。安心しな。これからする話には、そんなもの、なんにも問題になんかならないんだからね。

だからな、聞いてくれよ。聞いてくれ。好きなように聞いてくれ。それでもう、十分なんだから……。

ああ、でもこれだけは最初に言つとくぜ？ オレはな。オレは、悪魔なんだよ。そう、オレは悪魔なんだ。悪魔なんだぜ。

だからな、それだけは常に頭に入れて話を聞いておいてくれよ。それだけはお願いだぜ。

さあ、いい加減もう前置きにも飽きてきた頃だろう？ 嫌気がさしてきた頃だろう？ だからそろそろ始めよう。ほら、オレは悪魔だからよ。さつそく一つ、アンタの嫌がることをしてみたってわけさ。

ああ、ちよつと待つてくれよ。もうしないから。もうしないから、だから聞いてくれよ。なあ、待つてくれ。もう話すんだから。話しを始めるんだから。嫌がらせも何もないだろう？ な？ いいかい？

OK？ ……今の発音どうだった？ いや、ジョークだ。わかつた。I, m sorry. 大丈夫だ。もう訊かない。訊かないから聞いてくれ。始めよう……。

オレはな、さつきも言ったように悪魔だ。まあ、悪魔つつつても色々いるだろう？ アンタは悪魔に詳しいかい？ どんなの知ってるよ？

……OK. そうかそうか。まあ、そもそもちゃんとした分類なんかねえからな。悪魔つつつても色々いるが、オレはな。オレは、憑とりつ

くタイプの名前もねえようなくだらねえ悪魔だ。悪霊の類さ。

いや、心配はいらないぜ。この話を最後まで聞くと憑りつかれる、なんてつまらねえオチじゃあねえからよ。それは保証するさ。オレの一番愛しい人に誓って言おう。オレはアンタに憑りつかない。

……あつ。今アンタ、悪魔に愛しい人なんていんのかつて思ったただろ？ 思ったな？ 思ったよなあ……、ごもつともだよ。でもいるんだあ、これが。他の悪魔は知らねえよ。いるかもしれねえし、いねえかもしれねえ。余所よその悪魔は知らねえさ。でもオレはいる。オレにはいるのさ。オレは悪魔だぜ？ でもいるんだよ、好きな人が。笑っちゃうだろ？ ジョークだジョーク。喜劇ってやつさ。

さあー、そろそろ本筋に戻ろうか。

オレあよく人間に憑ついてよお、色んな悪さをしてきたもんでな。オレは男だからよお。いや、悪魔に男も糞もあんのかいつて話だがよ。まあ、なんだ。一応男なんでよお、女とやりてえんだよ。男とはやりたかねえ。そういうことだ。まあ、そういう記号だと思ってくれりやあいいさ。そんなもんだろ？ 性別なんて。

いやあ、でよお。オレあハンサムな男に憑りついてな、女たぶらかして散々楽しんだりしたのさ。夜に紛れて散々やったな。何人孕はらませたかわかんねえ。しかも人間の子じゃねえ。悪魔の子をよお。クツ、ケツ。オレは直接孕ませらんねえからよお、そうやって人間の体を使ってやるのよ。でも、男の体は人間だ。それで人生狂っちゃまった男も少なからずいたね。どっちの人生もそれでおじゃんよ。はっ、傑作だろ？

まあ、大抵は痛い目みんなは女だけだけどな。カツ、それでも十分傑作だがよ。だってだぜ、アイツら馬鹿みてえに股おっぴろげて犬みてえに喜んでやがったくせによお、孕んだ途端に……ア？

なんだ？ もしかして気分悪いか？ こういう話はよ。ハンツ、オレは悪魔だぜ？ それぐれえのこととして当然だろう？ まあでも、この話はオレのしてえ話とは関係ねえしな。ここで帰られちゃあオレもたまんねえ。オレの武勇伝はこの辺にしとくさ。な。だから聞いてくれよ。なあ、聞いてくれ。

それでだ。他にもまあ、さっきのなんて序の口つてえくらいの悪さをずいぶんオレは楽しんだもんさ。人の体を使つてな。盗みも殺しも、全部なんてとてもじゃねえが覚えちゃいけないくらいやったさ。毎日毎日明け暮れた、つてえやつだな。

でまあ、そんな中でよお。子供とか恋人なんかに死なれた奴をな、騙して楽しむつてえのもまあまあやつてただけどよお……。

……まあ、なんだ。ある時オレは、ある女に憑いたわけよ。オレがしてえのはな、その時の話なんだ。

オレが憑いた女はな、まあ綺麗な若い娘だったが、オレはそいつのことはよく知らねえ。名前も何も知らなかったな。知る必要なんてなかったからよお。

だつてオレはその女に、その女として憑くわけじゃなかったからよ。

その女は、綺麗な女ではあったが、不幸な女だったな。売られちゃったんだよ。その上自分の人生を奪われちゃった。自分つてものからして奪われちゃったんだよ。ただの器にされちゃったのさ。なんの器つてそりゃあ、オレの器よ。

そいつに憑いたのは教会だったよ。田舎の村のはずれの錆びた埃くせえ教会に、その女は連れてこられてた。何人かの目を赤くした奴らに囲まれてやがつてな。

そいつらは本当に、林檎みたいな真つ赤な目をしてたわけじゃないぜ。腫らしてたんだよ。充血させてたんだよ。泣いたせいだな。

そいつらがまた、笑えるんだぜ。器として買ってきた女囲んでよ、天使も神父も来ねえだろうポロツポロの教会で踊つてやがんの。なんかぶつくさ言いながらよお。キチガイだろ？ 手を空に向けて、一心不乱に祈つてやがんの。

何をつて、死者の魂がその女に降りてくることをだよ。んなわけねえだろ？ そんなアシの成長でも延々と再現するみてえな馬鹿みてえなダンスをしてよお、わけわかんねえ呪文をぶつくさ口ごもつて、何が降りてくるつてえんだ？

オレが降りてくるんだよ。

笑っちゃうよな。傑作だ。ハハア……、オレは悪魔だぜ？

奴ら、大事な家族やら恋人やら友人やらに死なれちまって、頭がおかしくなっちゃったんだよ。奴ら、もう一度会いてえって。神にでも悪魔にでもすがったって、何をしてでももう一度だけ会いてえってよお。なあ。わかるかアンタに、その気持ち。そんな馬鹿みてえな糞みてえな滑稽な奴らの気持ちがよお。アンタには、わかるか？ ……わかるか？

……そうか。……まあ、いいぜ。オレは悪魔だぜ？ ケツ、クケケ、アハア……。

オレはその時も、奴らをしばらく眺めて腹抱えて笑ったりなんかしてたのさ。でもまあ、見飽きてるからなあ、そんなもんは。すぐに飽きて、女の体に降りてったわけよ。女はもう、そこで死んだようなもんさ。たったそれだけだぜ？ たったそれだけで、簡単に人間のちっぽけな人生なんか終わっちゃうんだ。オレがそのまま出てってやればそうはならなかったけどよお。女の体が死ぬまで、あん時のオレはずっと女の中にいたからな……。へへ、滑稽なもんだろ？ そんな簡単に終わっちゃうんだぜ？ 人生なんてもんはよお……。

ともかくオレは女に降りてってよお、瞬いて、何が起こってるのかわからねえみたいいな純粋な乙女の表情を作ってやったのよ。ちよつと驚いてるような、そういう顔な？

あん時は一人の太ったババアだったかなあ？ いやちげえ。大人しそうなジジイだったよ。

「……マリア、なのか？」

マリア、なのか？ だつてよ？ んなわけねえじゃん。オレは言うてやんのよ。

「……パ、パ？ どうして……」

鈴が鳴るみてえな声でよ、か細い綺麗な乙女の声で言つてやんのよ。このオレが。オレがだぜ？ オレは悪魔だぜ？

「マリアー」

んで太ったババアが泣きながら抱き着いてくるわけよ。気持ちわるい。その時のオレは心底そう思ったね。でももちろん、そんなこと

はお首にも出さねえよ？

「ママ……うっ。ママ」

名女優のオレはそこで泣いてやるのさ。つーと一筋のしずくをな、こお、頬に伝わらせるわけよ。泣きじやくつちやいけねえぜ？。しとやかにやんのよ、ここは。

んで後の奴らも泣きながら喜んでオレに飛びついてくるわけ。笑っちゃうだろ？。オレは悪魔だぜ？。なんでもいいんだよ、奴ら。それっぽけりやあもうよ。そらあ、見た目も声も似たような女を選んできたんだろうが、別人の体に、入ってんのもオレだぜ？。オレだ。オレだよ。オレは悪魔だぜ？。それで奴ら、あんなに喜んでよお。笑っちゃうよな？。滑稽だよな？。馬鹿みてえだよな？。オレは、オレはな。オレは悪魔だぜ？。

オレはマリアのことはほとんどなんでも知ってるからよ。オレをマリアだと信じたい奴らを騙すのなんて赤子の手をひねるようなもんさ。やったことあるか？。簡単だぜ？。赤子の手をひねるのなんて。子育てに疲れた女の体に憑いてやんのよ。朝飯前に、ちよちよいとな。へッ。まあ、そんなことはどうでもいいさ。

とにかく奴らを騙すのは簡単だ。サクツと滑稽な喜劇が見られる。でも、たまにいんのよ。疑りぶけえ面倒な奴がよ。

そんな時もいたなあ……。

「シャルル！ お前も来いよ！ 本物だ！ 本物のマリアだ！」

一人の男がそうほざいたな。

「……」

シャルルは入口近くのボロけた席に座って、何も言わなかった。それがオレとシャルルの出会いだった。

「シャルル！」

「……」

「シャルル！」

「……」

「シャルル！ マリアが」

シャルルは無言で立ち上がると、オレの方に歩いてきた。ハンサム

な男だったね。こいつに憑けば、女にはしばらく困らないだろうと思っただよ。シャルルはマリアの恋人だった。

「マリア。マリアなのかい？」

「シャルル……。ええ、そうよ。シャルル……。シャルル、会いたかった！」

オレはそう言うとまた涙を流して、シャルルに抱きついたんだけどよ。オレを見て微笑むシャルルの表情は、インクで描いたピエロの涙みたいだったよ。シャルルのそんな表面的な笑顔に気付ける奴は、誰もいなかったけどな。オレを除いて、な……。

オレの肩を優しくつかんで引き離して、シャルルはオレに言ったよ。

「僕もだよ、マリア。マリア……。でもごめんね。ちよつと僕は、外の空気を吸ってくるよ。ここは埃っぽくて、僕は少し気分がすぐれないんだ」

「シャルル、大丈夫？ 確かにあなた、少し顔色が悪いみたいだわ……」

「ああ、大丈夫だ。少し外の空気を吸えば元気になるよ。だから、それまでみんなと話していてくれ……」

「ええ。また後でね。愛してるわ、シャルル」

「ああ。僕は愛してるよ、マリアをね……」

そう言うとシャルルはオレたちに背を向けて歩いて行っただよ。大したもんだろ？ オレの演技はもちろんだが、シャルルだよ。

「シャルルは優しいから、きっと私たちに遠慮したのね」

「マリア、後で二人きりで会ってあげて」

「ええ、もちろん……」

見当違いな馬鹿どもの言葉に、オレは笑顔でそう答えたよ。

アイツはいい。その時のオレは、そう思っただね。まあ、確かにあれは遠慮だ。オレを信じて喜んでる馬鹿どもの手前、シャルルはああ言っただのさ。だが、最後の言葉を聞けばシャルルがオレを疑ってるのは明白だ。

すでに飽き始めてたオレは、滑稽なコイツらでもう少し適当に遊ん

だら、シャルルと二人きりになろうと思ったね。それでシャルルが本心を出したら、怒らせてオレを殴らせでもしたらいい。いや、別になんたっていいのさ。シャルルと二人きりになって、その途中でオレが帰れば何でもいいのさ。後は高みの見物決め込むだけだからよ。せつかく金もかけて戻ってきた最愛のマリアがいなくなつたと思つたら、連中はどうすると思う？ まあまず間違いなく、シャルルを責めるだろうよ。見ものだろ？

後で傷心のシャルルに憑いたっていい。最愛の人を失つて落ちぶれたハンサムな青年なんて、女は好きだろう？ ともかくオレは、その時にはもうシャルルに目をつけてたつてわけさ。

——さて、ずいぶん喋つたな。どうだ、少し疲れたんじゃねえか？ 腹とかどうよ？ 小便は平気か？ オレは、オレはちよつと目が変なんだ。ゴミでも入つちまつたみてえによ、涙が出そうで仕方がなくてな。ちよつくら一服してくるからよ。その間にアンタも一息入れてきたらどうだ？

なに、もう話の途中で رفتたかもしれねえけどよ。まあ、アンタのタイミングでいいんだ。オレは話さえ聞いてもらえりや、後は別になんでもいいからよ。そういうもんだろ？ ここはよお？ これはよお？ な？

ま、オレはなんにせよちよつくら一服入れるからよ。別にいいつてえんなら、ちよつと遠くでも見つめて、ちよつくら目でも休めてよ。またすぐに話を聞いてくれりゃいいさ。

そんな時にはもう、オレは戻ってきてるからよ。

な？ じゃ、ちよつくら行つてくるぜ？

待たせたな。

準備はいいかい？

オレはもう、ばつちりよ。目玉取り出して聖水で洗ってきたからよ。

いやあ、アレも楽しかったなあ。いやなに、昔の話よ。聖水って触れ込みで適当な汚水を売ってやがる悪人がいてよお。オレあソイツの聖水とやらで顔をパシヤパシヤ洗ってやんのよ。するとああ不思議だぜ？ 聖なる力で水が動いたって、客は大騒ぎで信じ込んでしまうのよ。

でもな、信じ込んでしまうのは客だけじゃあねえ。馬鹿な偽聖水売りも信じちまいやがって、俺はすげえんだって思っちゃうんだな。そこでよお、オレはそれからソイツが聖水を売るたんびにパシヤパシヤへそやらケツやらを洗ってやんのよ。

するとたちまち大人気。売れて売れて男は大金持ちさ。んで偉い奴の耳にも評判が入ってよお、ある日その偉い馬鹿に呼ばれんのよ、ソイツ。

んでな、流石にもう汚水は使わねえぜ？ 悪い評判が立つと困るからよお。金に余裕もあるし、ちったあマシな水を使うさ。相手は偉い奴だし、その日は余計にな？

でだよ。その偉い馬鹿の前でいつもみたい偽聖水売りは呪文を唱えて水を出すのよ。オレはな、何もしねえ。いつもみたいに、顔もケツも洗わねえ。ただ見てんのよ。焦ったねえ、アイツ。いや、焦って焦って、その内に偉い奴も怒りだしてね。そのまま偽聖水売りはコレよコレ。死罪。

ハッ、笑つちまうだろう？

でもまあ、昔の話だ。今のオレあずーうつとここにいつからよお。偽聖水なんか持つちやいねえよ。へへ、ただのジョークさ。目玉なんて取り出せやしないよ。悪魔だつてなんでもできるわけじゃあないんだぜ？ 目玉なんて取れるかよ。へッ。

まあ、無駄話はこれくらいにしとくか。せつかく休憩をはさんだばかりだつてえのに、アンタに飽きられちまっても困るしな。

また、話を始めるぜ？

いいかい？

……よおし、じゃあ始めよう。

でだ、どこまで話したつけなあ……、ああ！　そうそう。場面転換だ。

オレは適当に馬鹿共の相手をしてから、シャルルのところに行ったのさ。

あれは月のない晩だった。星の明かりだけを頼りに、オレは外で一人座つてるシャルルのところへ行ったのさ。風は涼しかったね。

「……シャルル。具合はどうかしら？」

「……はあ……。まだあまり優れないんだ」

シャルルは悲しげな目でそう言ったよ。

「シャルル……。今日はもう休んだ方がいいんじゃないかしら。無理しないで。明日の夜にまた会いましょう？」

なんて言ったがよ、その時のオレにはシャルルを気遣う気なんてこれっぽっちもなかったんだぜ？　なんてったって、オレは悪魔だぜ？

悪魔が人間の心配なんぞするわけねえだろ？　でも仕方なかったのさ。マリアならそれぐらいの気遣い、したに決まってるんだからよ。

オレの考えはさつきも言ったろ？　シャルルをハメるためにはよお、しばらく喋ってから帰らねえと意味がねえ。じゃねえと、オレ

にシャルルが何かしたせいでマリアがいなくなっちゃったと思わせらんねえだろ？　周りの連中によお。

だからオレは、とりあえずマリアのふりしてそう言ったのさ。どの道シャルルは本当に体調が悪いわけじゃねえ、つてのは見抜いてたからよ。いや、気分がすぐれねえつてのは本当だったろうよ。でもそれは、オレを疑つてたからさ。でも、帰っちゃまうような体調の悪さじゃねえつてことは、オレにはわかってたのさ。

案の定、シャルルは言ったよ。

「いや、大丈夫だ……。僕は君と話がしたい」

「……私もよ、シャルル」

「……、はあ……。ねえ、君の気分を害してしまうかもしれないようなこと、訊きいてもいいかい？」

「私の気分を害してしまうようなこと？ シャルル……。それは、どういうことかしら？」

「はあ……。これは、僕がおかしいのかもしれない。だってみんな、信じているんだから……。でも。でも……。なあ、僕には信じられないんだ。君が本当にマリアだなんて。死んだマリアが君の体を借りて生き返るだなんて、やっぱり僕には信じられないんだ。君がマリアだって、僕には信じられないんだ」

「……シャルル」

オレは思ったね。シャルルは思ったより弱気だったつてね。もう少し食ってかかってくるかと思ったんだがよお、とんだ肩透かしだったもんだぜ？

オレは優しい声で言っつてやったよ。布団で眠りにつく子供を包み込む夜闇のようにな、優しく言っつてやったのさ。

「無理もないわ……。シャル」

でも、シャルルはオレの声を遮ったのさ。まるで子供がぐずつて夜闇を怖がるようにな。シャルルは優しいオレの声を突き破つて言ったのさ。

「なあ、いいんだ。君にも色んな事情があるだろうから、君がマリアとしてここにいたければ、ずっとそうすればいい。みんなも君がマリアだと思っつていければ、少しは前に進んでいけるだろうから。でも、僕にだけは。僕にだけはどうか、嘘をつかないでくれないかい？ 君は、君はマリアじゃないんだろう？」

「……シャルル」

オレは迷つたね。肩透かしを食らつたと思つたら、やっぱりそんなことなかったんだ。シャルルは弱気だったが、シャルルは本気だったんだ。本気でオレを疑つてたんだよ。

「すまない。やっぱり今日は、もう帰つて休むことにするよ。明日また会おう。それじゃあ、おやすみ」

そう言つて立ち上がったシャルルはさつきとオレに背を向けて歩き出しちまった。オレはもちろん呼び止めたよ。

「待って、シャルル！」

「……」

無言で振り返つたシャルルは、オレを見て少し目を見開いたね。なんでつて、オレは泣いてたからさ。もちろん本気の涙じゃねえ。さつきまでとおんなし、嘘泣きつてやつさ。つーとね。ほら、頬を伝らすアレよアレ。

「……ごめんささい」

そう言つてオレは頬の涙を拭つて言つたのさ。

「疑うのも無理はないわ。シャルル。あなたは思慮深いもの。でも。でも、私はマリアよ。あなたがたとえ信じてくれなくても、私はマリアなのよ。だから。だから……」

オレはまた涙を伝らせながら言つたね。

「待ってるわ、シャルル。また明日……」

そう言つてオレは教会に戻つたよ。でも、その後あの女の体を出て戻りはしなかった。シャルルに疑われて傷心のマリアが消えちまつたなんてオチだつて別によかつたんだがな。約束しちまつたもんだから……。

ほら、悪魔は契約者との契約は破らないつて言うだろ？ 別にオレ

は悪魔としてシャルルと契約してたわけじゃねえし、そもそもオレはそういう類たぐいの悪魔でもねえし、それとこれとは話が違つたがな。あんな時のオレはとにかくまた明日シャルルと会うことにしたのさ。気まぐれつてやつさ。そういう気分だつたんだ、不思議とな。なぜだかわかんねえけど、そういう気分だつたのさ。

そういうわけで、オレは次の日もシャルルと会つた。シャルルはまだ、オレのことをマリアだと信じてなかつた。まあ、それが正しいんだけどな。だつてオレは悪魔だぜ？ マリアじゃないんだからな。

それで、オレはその次の日もシャルルと会つた。その次の日もまたシャルルと会つた。シャルルは次の日も、その次の日もオレを信じなかつた。オレはなんでだか知らねえが、シャルルを信じ込ませてやる

うと思っただ。ここまでかたくなにオレを信じねえシャルルを騙して、その末にオレが消えたら後悔するだろう？ なんでもっと早く信じなかったんだって、嘆くに決まってるだろう？ その顔が見たかったのさオレは。そう、だからオレはシャルルを騙すことに決めただったさ。

オレは毎晩シャルルと会ったね。オレは夜しか外に出られない、そういう設定だったのさ。そういうそれっぽい設定があった方が、奴らも信じやすいだろお？ だからオレは夜にだけ外へ出て、シャルルと会った。色んな所へ行つたよ。それでもシャルルの疑いはなくならなかった。

ある日、小川のほとりを二人で散歩したんだ。川をのぞき込むと雑魚ざごが眠ってやがった。

「ねえ、シャルル。これはなんとというお魚かしら。小さくてとっても可愛いわね？　ねえ、シャルル？　聞いている？　シャルルったら」

オレは魚の名前なんかこれっぽっちも興味なんかなかったんだがな？　マリアはそういうことをいう女だったんだよ。だからオレはそう言ってやったんだが、シャルルはそんなこと言うオレを見て、寂しそうに微笑むだけだったさ。

その内に段々と暑くなつてな、初めの内は毎日のようにオレに会いに来てた馬鹿共も頻繁には顔を出さなくなつてな。シャルル以外の奴らとは次第に会う頻度が減つていったよ。

夜はいくらか涼しかったが、夏真っ盛りになりやあ虫もよく出やがったな。

「きやつ、シャルル！　虫だわ……。あれはなんという虫かしら……。ねえ、怖いわシャルル」

オレはよくそんな風に言つてシャルルに飛びついたな。オレは虫なんかこれっぽっちも怖くないけどな、マリアは虫を怖がる女だったんだよ。だからそんな風に言つて怖がってみせたんだけどな？　シャルルはやっぱ寂しそうに笑うだけだったよ。

その内にまた涼しい季節がやってきてな。

ある日は二人でワインを飲んださ。アレはうまかった……。

「ねえ、シャルル。このワイン、美味しいわね」

「そうだね……」

「こんな血みたいな色した飲み物を好き好んで飲むだなんて、人間はきつと本当は血が飲みたいのよ。その本性は野蛮なんだわ。それを隠して優雅にワインなんか飲んじやって、馬鹿らしいったらありやしないわね。そうは思わない？ シャルル」

「……フフ。フ」

「シャルル？ 何がおかしいの？」

「君、最近やつと本音を喋ってくれるようになったね？」

「……」

オレは思わずシャルルの目を見て何も言えなくなっちゃったよ。

オレはその頃、ずいぶんシャルルと長いこと話してたもんだからよお、少しずつマリアを装うのに飽きてきちまつてたんだな。それに、シャルルと喋るのに慣れてきちまつてたもんだからよお、気持ちだつて緩んできちまつてたのさ。

オレはしばらく沈黙した後、あわてて口を開いたね。

「……シャッフ、シャルルったら。何を言ってるのかしら。私だつてこうして毎日暮らしてたら、言うことくらい変わるわ。考え方だつて変わるのよ？ 私はお人形でも、いつ読んだつて変わらない物語の登場人物でもないんだから！」

「フフ。それもそうだね……。でもね、これは僕の気のせいかもしれないけど、やっぱり僕にはなんだかそんな風に思えるんだ」

オレはシャルルの顔を直視できなかつたよ。

シャルルは本当に可笑しそうに笑つたかと思うと、やっぱり切なそうな顔で微笑んだんだ。でも、その顔は少し、以前までの微笑みより明るかつたように思えたんだよ。気のせいかもしれないけどな、オレにはなんだかそんな風に思えたんだよ。

それでよお、そんな日々を送る内に、寒い季節がやってきてな。

よく雪の中を散歩に出かけたよ。あれは心底寒かつたなあ……。

「ねえ、シャルル。雪って人間みたいよね。ほら、こうやって握つたらすぐ消えちやうのよ。こんな簡単になくなっちゃうの。可笑しいわ

よね？ 命みたいだわ。ほら、シャルルもやってみなさいよ。面白いわよ？」

そう言つて笑うオレを、シャルルも笑つた。それはやっぱり寂しそ
うだったけどな、優しくどこか楽しそうでもあつた。そういう笑顔
だつたよ。

そんなこんなでな、オレは気づけばマリアとして過ごすようになってから一年が経とうとしてたんだよ。

そう、いつの間にかオレがシャルルと出会つたのとおんなじ春がまたやつてきてた。

そしてな。そして。あの夜が、やつてきたんだよ……。あの夜さ。

あの日がな。あの日があ、やつてきたんだよ……。

なあ、あと少しだ。あと少しだから、聞いてくれるかい？

いいやあ、聞いてくれ。

フツ、ヘツ。クケエツ……。笑つちまうような結末が、あと少しでやってくるからよお。だからもう少しだけ付き合つてくれよ。
なあ、アンタ。

オレはな。オレは、オレあ、オレは悪魔だぜ。

前々から不穏な動きがあるのは知ってたんだ。

いやあなに、気づかれちゃまってたのよ。どっから湧いてくるんだろおなあ、ああいう連中はよお。オレが悪魔だってな、勘づいた奴らがコソコソしてやがるのに気づいたのさ、オレあ。悪魔祓いの連中だ。うっとおしい虫どもさ。

まあでもな。ああいう悪さをしてるとなあ、ああいう連中はその内に湧いてくるもんでよお。オレも慣れっこだったからよお、大丈夫だろおと高をくくって放置してたのさ。

大抵の奴らはオレとやってることは大差ねえ。ようはインチキさ。ペテンってやつだ。何の力もありやしねえ。それでたけえ金貰ってんだから、どっちが悪魔かって話だよなあ？ たまに本当にすげー奴もいるけどな。普通の奴はそもそもなんにもわかりやしないんだ。オレらのことなんて見えも聞こえもしねえんだ。だからよお、ちよつと悪魔が見えるとか、その程度ですげーんだよ。でな、つまりだ。しっかりわかってる奴なんざいやしねえもんだから、大抵はよくわかってねえで、わかった気になってやってんのよ。色々なことをな。ほらちようど、前に話した偽聖水売りみたいによ。

だからよお、オレはあん時も高をくくってほっておいたのよ。んでな、オレはあの日もいつもと変わらずシャルルと夜の散歩にくり出すつもりだったのさ。あの日も月のない晩だったね。

オレは教会でシャルルが来るのを待ってたんだ。するとな、教会の窓を、コンコンと叩く音が響いてよ。見ればシャルルがいるじゃねえか。オレはびっくりして訊いたよ。

「シャルル？ どうしたの」

シャルルはすぐに口元に立てた人差し指を当てて、静かにするよう合図をした。

「大変なんだ。君を悪魔憑きだと疑っている、いや、信じている人たちがいる。彼らは君を殺そうとしているんだ。今晚、その計画を実行しようとしている」

オレはビリツと体に雷でも走つたみたいな衝撃を受けたね。連中、まさかもうそこまで動き出すとはオレも思つちやいなかったからよお。

シャルルはさらに続けたさ。

「まだみんな知らない。いや、誰にも知られない内に彼らは君を始末する気なんだ。でなくちや邪魔が入るからね」

「それで？ シャルルは私を殺しに来たの？」

無理矢理シャルルの口を塞ぐように言葉を突き出したオレに、シャルルは潜めた声のままではあつたけどな。語気を強めて言ったよ。

「馬鹿なこと言わないでくれ！ 僕は偶然彼らの会話を聞いて、君を連れ出しに来たんだ。逃げよう。今すぐに」

「……逃げてどうするの？」

「どこか遠くで、一緒に暮らそう。誰も僕らを知らない土地で、二人で一緒に暮らそう」

「……シャルル」

ククク、ケツ。可笑しいよな？ 笑つちまうよな？ だつてオレは悪魔だけ？ オレは込み上げてくる気持ちを抑えて、静かにシャルルの名前だけ、なんとか呟いたのさ。するとシャルルが言ったね。

「……いや、かい？」

「そんなわけないわ。嬉しいわ、シャルル。本当に……、本当に……」

「……。それじゃあ、すぐにでも行こう。時間がない。さあ——」

シャルルはそう言つてオレに手を差し伸べた。オレはその手は取らずに窓枠に手をついて、外へ飛び出すとシャルルの手をとろうとした。でも、シャルルの手はもう、オレに差し出されちやいなかった。「行くよ。こつちだ」

オレはシャルルに続いて夜道を早足に、身を潜めて進んだ。幸いにも空には月どころか星明かりすらほとんどなかったからよ。さほど難しくはなかった。

でもよお、もう遅かったんだ。

シャルルが突然、立ち止まって手でオレを制した。辺りには沈黙がこだましてるみたいだったよ。

少しして馬の蹄が地面を蹴る音が聞こえた。一つじゃない。二つ、三つ、もつともかもしれない。抑えちゃいたが、奴らはいつの間にやらオレたちの側にいた。それは音を聞けば明白だったし、その方向は一つや二つじゃなかった。奴らは分かれてオレたちを探してやがったのさ。

シャルルは無言で辺りを見回すと、近くにあつた小屋を指でさした。オレは頷いた。オレたちは歩き出した。

慎重に小屋に入ると、シャルルは声を潜めて言ったんだ。

「マズいな……。思ったより人数が多い。しらみつぶしに僕らを探しているんだ」

近づいて見れば思ったよりも大きく広かった木造の小屋の中で、声を殺してオレは答えた。

「どうしましょう……。ねえ、シャルル。逃げられるかしら。私たち、逃げられるかしら……」

「……」

シャルルはしばらく黙っていた。オレもしばらく黙っていた。しばらく沈黙が続いたさ。あれは長い沈黙だった。

その内に、なんだかパチパチと嫌な音が聞こえだした。嫌な臭いが、オレたちの鼻を突いて目を突いた。シャルルは突然、勢いよく立ち上がって窓の外を見た。

「火だ……」

シャルルは急いで入口まで駆けて行ったよ。それからシャルルは戻ってきた。表情を見てわかったさ。すでにオレたちは火に囲まれてるってね。

「……すまない。もう、逃げられそうにない」

オレの横に崩れるように腰を下ろして、シャルルは力なくそう言った。

「……シャルル。シャルル。あなただけでも逃げて。あの人たちの狙いは私でしょう？ だったら、あなたは大丈夫なはずだわ。そうよ、アイツらは外で様子を見るはずだわ。外に出て行って大きな声で叫ぶのよ。悪魔に憑かれた女を縛ってきたって。そうすれば、きつと

あなたは助けしてくれるわ。ねえ、シャルル。聞いてる？　ねえ、シャルルったら！」

声を大きくしたオレに、シャルルは言った。

「……嫌だよ。もう、もう嫌なんだ。別れるのはもう嫌なんだ。僕だけ残されるのは、もう嫌なんだ。もう、うんざりなんだ。もう、もう嫌なんだよ……」

「シャルル……」

「すまない。君を助けてあげられなくて……。もつと早く気づくことが出来たら……」

「シャルル……。ねえ。私がこの体に入ってから、あなたは一度も私のことをマリア、って呼んでくれていないわ。ねえ、覚えてる？　一度もよ？　一度もあなたは私のことを、マリアって呼んでくれなかった。ねえ。そうよね？　シャルル……」

「ああ……」

「じゃあ、なんで？　なんでなの？　あなたは私のことをマリアだつて、今も信じてくれていないんでしょう？　だったら私のことなんか置いて逃げたらいいじゃない！　なんで?!　なんであなたは私と一緒に死のうとしているのよ？　ねえ、シャルル！　なんで？　なんでなの?!」

シャルルはオレの方を見て、オレの顔を見て、オレの目を見つめて、静かに言った。

「……愛してるからだよ。君を。僕は君を愛してるからだ」

「……」

クツ、ククツ、クケエ……。オレは言葉を失ったね。目を丸くして、シャルルの目を見つめ返したさ。だってそうだろう？　笑っちゃまうよな？　可笑しいだろ？　オレは、オレは悪魔だぜ？

でも、シャルルは言ったんだ。

「確かに僕は君をマリアだとは思っていない。絶対に違うと、そう確信してさえているんだ。その理由は上手く答えられないけれど、それでも僕は君がマリアじゃないって、そう信じている」

「……」

「でも、それでも僕は君を愛してしまっただ。君とずっと過ごしている内に、僕は君を愛してしまっただ……」

「……どうして」

「わからない。わからないけれど、僕が君にひかれたのは、君が僕と似ているような気がしたから……」

シャルルの言葉は消え入るようにして途切れた。

「……似ている？ シャルルと、私が？」

「ああ。これは僕の勘違いかもしれないけれど、君は悲しいんじゃないのかい？ 僕にはそんな風に感じられるんだ。君は悲しんでいる。君は、傷ついている。君は、決して満たされない欠けた心を持っている。そんな風を感じるんだ。マリアを失って、心が欠けてしまった僕みたい……」

「……」

バチバチと炎が激しく燃える音が段々大きくなってきた。小屋もとつくと燃え始めてやがる。オレは静かにオレの返事を待つみたいに黙ってしまったシャルルを見つめて、思っただよ。決めたのさ。この女の体とは、ここでおさらばだつてな。

このままじゃあ、オレもシャルルもこの女の体も、この小屋と一緒に燃えちまう。そいつはまっぴらごめん。オレはこの女の体と心中する気なんかこれっぽっちもねえから。早くしねえと間に合わねえ。だからオレは一か八か、急いでこの女の体を抜け出すことにしたのさ。

シャルル、驚くだろうなあ……。目の前でオレが抜けて、正気に戻ったこの女を見たらよお。へッ。あの時のオレは、そう思ったよ。ああ、そう思っただのさ。お気楽になあ。もう、その後のことなんか考えてたさ。その後どう動くかを。オレは、オレは考えてたのさ。

でもよお、それは殺す前に売ったクマの皮だったのさ。そう、クマの皮だったのさ。オレは、オレはよお。あの女の体を抜け出さなかった。いいや、抜け出せなかったのさ。

オレは目を見開いてただろうね。嫌な汗が流れたよ。チクシヨウって思っただね。なんでだと思っただ？ 出られなかったんだよ。あの

女の体からよお。オレはな、オレはよお、オレは出られなかったんだよ。あの女の体からよお！

アイツら！ アイツら何か小細工してやがったのさ！ 腹が立ったね。腹が立ったよ。アイツら端はなからこれが狙いだったんだ！ この女の体ごとオレを殺すつもりだったんだ！ 許せねえだろ？

なあ、許せねえ……。何よりも、何よりもなあ……。オレは、アイツらのことが許せねえんだ……。許せねえ……。

「大丈夫かい？」

シャルルはそう言った。オレに、そう言ったんだ。

オレはすべてを諦めたね。同時に諦めきれなかった。だからな、オレはシャルルに言ったんだ。

「ねえ、シャルル。私は、……いいや。オレは、オレはな。オレは悪魔だぜ」

「……」

シャルルは言葉を失くしちまったみたいな顔してオレを見つめたね。オレはそんなシャルルに畳みかけたよ。

「シャルルの言う通り、オレはマリアじゃねえ。だが、この女が演じてるわけでもねえ。オレは悪魔だ。マリアに死なれて悲しみのどん底に落ちた奴らを騙してもてあそんで楽しむために、この女の体に憑りついた、オレは悪魔なんだ。悪魔なんだよ。オレは悪魔だぜ。ええ？ シャルル。シャルルのこともなあ、オレは騙すつもりだった。騙すつもりだったんだよ」

でもオレにはもう、オレにはもう嘘はつけなかった。

だからオレは黙った。黙ったのによお、シャルルは訊いてきやがったんだよ。訊いてきやがったのさ。笑っちゃうよなあ。クツ、ククツケツ、クケエ……。

「……君が、悪魔？」

「ああ、そうさ。オレは悪魔だ」

オレはもうタガが外れちまってよお。嘘なんかもう、一つもつけなくなっちゃってた。なのによお、シャルルは訊くんだよ。訊いたんだよ。

「なんで……」

「ア？」

「なんで、今になってそれを言う気になったんだい。君はなんで、今になってそれを言う気になったんだい？」

「それは……」

オレは、嘘をつけなかった。

「それは、愛してるからだよ。シャルル。なあ、オレはシャルルを愛してるからだよ。おかしいだろう？ 笑っちゃまうだろう？ オレは悪魔だぜ？ オレは悪魔なんだぜ？ しかもよお、男なんだ。男なんだぜ。オレは男の悪魔で、マリアのふりしてこの女の体に降りてきてよお。人間騙して楽しむような、そんな悪魔なんだよ。シャルルのことも騙す気ですよ。それでずっと、騙す気ですよ。なあ、シャルル。オレはなのに、なのにいつの間にか、シャルルのことが、シャルルのことが好きになっちゃまってたんだよ」

なあ、可笑しいだろう？ 笑っちゃまうだろう？ なあ？ なあ！ オレは、オレは悪魔だぜ。悪魔なんだぜ。なのによお、オレはシャルルのことを愛しちまってたんだ。なあ、可笑しいだろう？ 可笑しいだろう？

なあ、笑ってくれよ。笑ってくれよ！ 笑えよお！ なあ！ 笑えよ！ 笑えよお！ ……喜劇だろう？ なあ？ なあ！ なあ……。

「なあ。だから、だからよお……。今からでも遅くねえだろう？ なあ、逃げてくれよ。まだ間に合うだろう？ オレは本当に悪魔なんだよ。シャルルの大切なマリアの死を踏みにじって、もてあそんで、笑ってやがった悪魔なんだよ。悪魔なんだよオ！ だから。だから、さっさと出て行けよ！ ほら！ 早く！ シャルル！ シャルルウ！」

いつの間にかオレは泣いてたよ。涙を流してたよ。本気の涙だった。これは、本当の涙だったよ。涙をもたない、泣くことのできない、実体のない悪魔のオレの、本気の涙だったんだよ。

「……信じられないような話だ」

落ち着いたシャルルの声を聞いて、オレはいくらか落ち着きを取り戻した。

「だろうな。でも本当だ」

「うん。なんだかそんな気がするんだ。君が僕にマリアだと言った時より、ずっと信じられる……」

「そうか。じゃあ、さっさと出てけよ」

「いいや、出ていかない」

「ア？」

「言つたろ？ 僕は君を愛していると」

「……でも、オレは、悪魔だぜ。オレは男で、オレは悪魔だぜ」

「ああ。それはちよつと驚いたけど。いいや、とても驚いたけれど。でも、僕は君を愛してしまつたんだ。この一年足らず、毎晩ほんの少しの時間だけれど、君と過ごして、君と話をして、僕は君を愛したんだ。それは事実だ。そこに嘘はない。僕は今、君を愛している」

「……じゃあ、なおさら消えてくれ。出てつてくれ。オレの望みを聞いてくれ。オレの言うことを聞いてくれ。なあ、オレを置いて出てつてくれよ」

「言つただろ？ もう、嫌なんだ。大切な人を失うのは、もう嫌なんだ……」

「シャルル……」

「ねえ、君の名前を覚えてくれないかい？」

「名前？」

「ああ。君はマリアじゃないんだろう？ だから、せめて最後に、君のことを君ではなくて、君の名前で呼ばせてくれないかい？」

「……悪いな。オレに名前なんてねえんだよ。オレは悪魔だ。オレはしようもない、ただの悪魔だ。だから、オレに名前なんざありやしねえんだよ」

シャルルは少し黙った後、オレの目をしっかり見つめて、口を開いた。

「悪魔。愛してる」

「……はっ。なんだい悪魔って。オレもだよ、シャルル。シャルル、愛してる」

小屋の中はもう酷く暑かった。オレたちの周りは、すでに激しく燃えていた。

「いいんだな、本当に……」

「ああ」

少しの沈黙の後、オレは言った。

「なあ、シャルル。手を、握ってくれないか……」

シャルルは返事をせずに、オレの手を握った。強く、強く、力強く握った。それはでも、優しくかった。とても、優しくかった。

オレがシャルルと手を繋ぐのは、それが初めてだった。シャルルの体にこんな風にして、しっかりと触れるのは、それが初めてだった。

オレは、指を絡める時間さえおしくて、そもそもそんな濃厚さなんかいらなくて、ただぎゅっとシャルルの手を握っていたかった。

オレは、オレは直接シャルルの手を握れないのが惜しかった。自分の体をもたないことが惜しかった。人の体越しにしか、シャルルの手を握れないことが、たまらなく惜しかった。だから、オレはシャルルの手をしっかりと、しっかりと握ったんだ。

オレは、シャルルの手をずっと握っていた。ずっと、握っていたよ。ずっと、ずっと握っていた……。

シャルルは死んだよ。

そしてオレはどういうわけか、今もこうしてここにいる。

オレはここで止まっちゃまってるのが、それでもなくなりもせずここでこうして存在してる。

はっ、なんでだろうな？

なあ、どうだったよ。オレの話はよお。

笑っちゃまうだろう？ 可笑しかっただろう？ とんだ喜劇だっただろう？

オレは悪魔だぜ？ 悪魔が人間の、しかも男の悪魔が男の人間に恋をしちまつただなんて……、笑っちゃまうだろう……。なあ、笑っちゃまうだろう……。

話はこれで終わりだ。聞いてくれてありがとうよ。

最後に一つ、アンタに言いたいことがあるんだ。

オレはな、オレは悪魔だ。だからな、アンタの幸せなんかこれっぽっちも願っちゃいない。むしろ、アンタの不幸で腹がよじれるほど笑えるのがオレだ。

でもな、シャルルは違う。シャルルは優しい男だった。他人の不幸に涙して、他人の幸せを本気で願えるような、そんな優しい男だった。世界が優しくあることを願い、世界のすべてを愛するような男だった。

オレが愛する人間はシャルルだけだ。でもな。いや、だからこそ、オレはシャルルの願いまで願う。オレの中で、シャルルの思いが生き続けるように。それが今もこうしてここにいるオレの、残っちゃまったオレに唯一やれることだと思ってるんだ。

だからオレは願うんだよ。世界が優しくあるように。

まあ、シャルルがそう願ったところで、オレがそう願ったところで、世界は優しくねえだろうなあ？

アンタの人生だつて、そうだろう。色々あるだろう？ 今だつてそうだろう？ 色々あって、こんなとこにまで迷い込んできちゃった。

なあ、オレはここで止まっちゃったよ。延々と永遠に、ここでオレの時間は、オレのすべては止まっちゃったよ。

だがよお。アンタは、アンタは止まるんじやねえぞ。色々あるだろうがな。色んなことがあるだろうがな。アンタは止まるんじやねえぞ。

なあ、知ってるか？ 悪魔ってえのはな、人の心の中にいるんだぜ？ アンタの心の中にもな、悪魔はいつも潜んでいてよ、今か今かと隙を待ってやがるのさ。アンタの心の中にもな、いつでも悪魔はいるんだよ。

なあ、コイツは礼だ。話を聞いて貰った分の、オレなりの礼だ。いらねえかもしれないねえが、一つ受け取ってくてよ。なあ、いらなきや後で適当に捨ててくれりやいいからよ。

だから。だからな。アンタにはこれから先も、色々あるだろうよ。今までだって、色々あつたろうよ。辛いことも、苦しいことも、色んなことがあるだろうよ。でもなあ、でも、それで立ち止まっちゃまいそうになった時は。それで人生を止めちゃまいそうになった時は。そんなときは、今度はオレが話を聞いてやる。返事も相槌もしやしねえが、それでも聞くだけ話を聞いてやるよ。だからよお。だから、止まるんじやねえぞ。

悪魔はいつもアンタの心の中にいる。心の中にいるぜ。忘れるなよ。

それでなあ、それでだ。

それで――。

オレは悪魔だぜ。

あとがき・追記

あとづけ

私のミ्यूズ、私のではないあなたに捧ぐ。

そして、貴方に捧ぐ。

読んで下さった方、ありがとうございます。
不快感を与えてしまったら、申し訳ございません。

二〇二〇年 二月 九日 着想

二〇二〇年 三月一日 脱稿

二〇二〇年 三月二五日 最終加筆修正

二〇二〇年 三月二七日 匿名公開（削除済）

「俺のミ्यूズ、俺のではないあなた」との繋がりが途絶えて

私は昨年の冬に、匿名でやっていたT w i t t e rのアカウント、
いわゆる裏アカというやつで、一人の女性と出会いました。

彼女とは一度も会ったことはありませんので、画質粗目の写真や録
音・配信などで、お顔やお声などを見聞きさせて頂いたことはありません。
さすが、本当に女性であるという確証はありません。

それでも、私はほんの数カ月程度のやり取りで、彼女のことを本気

で好きになってしまいました。そして、彼女はその思いに交際などの形で応えてはくれませんでした。優しく受け止めてくれました。私も交際だとかそういうことはむしろ微塵も求めていませんでしたし、お友達として末永く関係が続けばいいなと思っておりました。

Twitterで切り取られた彼女しか知らないのに、それで「本気で好き」だなんてという気持ちは私にもあります。でも、同時に、私は思うのです。

もしも目の前にいる人を好きになっても、それは目の前にいる人そのものを好きになっっているわけではないんじゃないかと。

相手そのものをではなく、相手を見て、聞いて、感じて、思っ、いわば自分の中に投影した相手を、相手の像を、相手の虚像を好きになっっているんだと私は思うのです。

ならば、好きになっただ相手が例えネットで知り合った部分的にしか知らない相手でも、キャラを作ったアイドルでも、誰かが考案したキャラクターでも、拾い画加工音声なりきりテクニシャンネカマおじさんであろうとも、本質的には変わらないのではないのだろうか……。

私は、そんな風に思うのです。

それはとても悲しくて虚しいことのように思えますが、同時に、だからこそ、誰かを好きになるということは素敵なものなんじゃないかとも思います……。

そんなこんなで私は、私の思いを受け入れてくれる彼女に、何度か詩歌を詠んで送りました。

もちろん、誰にでもそんなことをするわけではありません。そんなことは初めてでした。

彼女は出会った時に、匿名の裏アカの中にほんのわずかに色濃く表れていた私を、私の言葉とその感性を褒めて下さいました。

それで、私は空リプのような形で、彼女への思いを無定形の詞や短歌などの言葉にしてツイートするようになりました。

実際のところ、それを彼女はどう思っていたのか私にはわかりません。「コイツ、ちょっと褒めたら短歌詠みやがったwww」とか思っ

いたかもしれません。

それでも、私とのやり取りの中での彼女は、それを喜んで褒めてくれていました。だから私も、不安を胸にそれを続け、たくさんのインスタパイアを与えてくれた彼女を「俺のミューズ 俺のではないあな」と表現しました。

Twitterで知り合った顔も知らない女性を好きになって詩歌を送るだなんて、まるで平安時代の暖簾越しの恋みたいだなと思っただけです……（笑）。

『オレは悪魔だぜ』は、そんな時期に観測した小説でした。

あらすじにもある通り、米津玄帥さんの『Lemon』のMVからインスタパイアを受けたもので、直接彼女の存在にインスタパイアを受けたわけではありません。

さらに、私はもともと自分の小説の構想に「観測する」という言葉をあて、フィクションではあるもののノンフィクションのつもりで、私が観測した異世界や並行世界やもしかしたらこの世界での本当の出来事を文章に書き起こすような感覚で、「リアル」であることを大切にして書いています。

ですから、直接的に彼女に向けて考えて、作って、書いたわけでもありません。

それでも、「今このタイミング」でこの物語を観測したことに彼女の存在が関係していることは明らかかな内容でした。

読んで下さった方ならばきっと、悪魔やシャルルの心情から、そこに私と重なるものがあることは感じ取って頂けるのではないでしようか。

心がシンクロしたことでその物語を引き寄せて観測することができたのかなと、そんな風に無理やり思っています……（笑）。

とはいえ私には同性愛の気は全くないので、もし仮に彼女を男性が演じていた場合、そういう意味で彼女のことを愛することは出来ないと思うのですが……。

そして、さらにその時期は、彼女の大切な人が死んだ時期でもありません。

そんなことなどもあって、まだ私の本名が彼女に知られていなかった当時、私はどうしてもこの小説を彼女に贈りたくて、匿名でこの小説を公開しました。

もちろん大切な人を失ったばかりの女性に贈るのに、この小説の大部分はふさわしくないようにも思いました。

ですから出来る限りいくつかの配慮などをしつつ、空リプというような形を取り、無理に読んで欲しいわけではないことも明言してリンクをツイートしました。

もちろん、やはりそこには私の身勝手さがあるので、配慮が足りていたとは全く思いませんが……。

結果的に、彼女は私の小説を読んで初めて「涙が出た」と言ってくれた人になりました。

どんな意味の涙でも、泣かせてしまったことへの申し訳なさはあるのですが……。

それでもやはりうれし過ぎるそのお言葉を信じるとして、それは小説の内容そのものに感動して泣いて下さったわけではなく、最後の部分に私の彼女への思いを感じて泣いて下さったんだとは思いますが。

私は「彼女を泣かせたい」、「それくらい心の奥底に強く届けたい」という思いがあり、それを乗せられる物語をこのタイピングで観測することができたので、小説という形にして贈ったので、小説そのものがよかったからではなくとも、涙が出たという感想はうれしかったです。そして、それ以上に彼女が語ってくれた言葉が私はうれしかったです……。

それに、この小説の最後の部分は、誰かが大切な人にこの小説を贈ることで、その思いが乗って、関係性が作用して、その真価を發揮する小説なのではないか。誰の心にも悪魔はいるから——。

なんてことを思ったりもして、だとしたらそれはとつても素敵なことだなと、そんな風に思いました。

あれから数カ月が経ち——。

先日、彼女との繋がりには途絶えてしまいました。

それでも私は、俺は、今でもあなたのことを思っています。

まだ今のところは、毎日思い出しています……（笑）。

改めまして——。

私のミューズ、私ではないあなたに。

そして、素敵なインスパイアを下さった米津玄帥さんと彼の『Lemon』に携わった全ての方に。

今まで私と関わって下さった全てに。

そして何より、ここまで読んで下さった貴方様に——。

ありがとうございます。

あなたの、貴方様の人生が幸せなものでありますように。

そして、もしよろしければ。

あなたの、貴方様の心の中にも悪魔がいるということをし、どうかお忘れないように——。

二〇二〇年 九月一〇日

二〇二〇年 九月二二日 最終加筆修正

『裏アカ それは たとえるなら 仮面舞踏会』

<https://twitter.com/i/events/1218568585452212224>